



127号
2007/ 10/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



港町ボカ(ブエノス・アイレス)、今も官能的なメロディーが、観光客の目と耳を誘う… アルゼンチン 2007年正月 嘉陽ひろ子

‘わんりい’127号の主な目次

北京雑感その(18)「北京の焼き芋」	2
私の調べた四字熟語(16)「孟母三遷」	3
ものしりノート(3)「呉音、漢音、唐音について」	4
アルゼンチン2・大草原ガウチョの記憶	6
四姑娘山・写真だより(5)「岩陰に咲く青いケシ」	7
中国を読む(45)「始皇帝暗殺」	7
5000m峰に立つ「四姑娘山登頂記」	8
私の四川省 一人旅(10)「稻城4」	10
スリランカ紹介(12)「サマーガーデンレストラン」	12
写真集「カンボジアの子どもたち」のこと	13
アフリカとの出会い(20)「国境の町・ナマンガ」	14
松本杏花さんの俳句集「余情残心」より	14
‘わんりい’が15歳になりました	16
‘わんりい’掲示板	17

♪「中国語で歌おう!会」10月の歌 ♪
zài shuǐ yī fāng
「在水一方」(作曲者:林家慶 作詞者:剥辨)

*歌詞は13ページ

9月に引き続き後半をマスターしましょう!

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

10月12日(金) 19:00~20:30

指導: 趙鳳葵

録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」 参加者募集中!どなたもお気軽に参加下さい。

●「中国で歌おう!会」於:まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)

19:00~20:30 会費(月1回):1,500円 体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。

暦とは素晴らしいものですね。人類が何千年も過して来た日々の中で、自然から学んだ事実のエッセンスなのでしょう。

7月の末、天気はぐずついていましたが蒸し暑く、夏はまだまだ続く気配、と感じていました。ところが、北京の老人の一人が、「暑さは、あと一週間もすれば収まるよ」と言うのです。半信半疑で聞いていましたが、8月8日の立秋を過ぎると、本当に、朝夕涼しい風が吹くようになりました。日中は相変わらず暑いのですが、暑さの猛々しさが和らいだ気がしました。昔からの知恵で、「このころには秋が始まる」という時期なのでしょうが、今では気象自体が暗示にかけられて、「立秋」という字を見たら秋風を吹かせなければと思っているように見えます。

秋は実りの季節でもありますね。日本だと、果物屋さんの店先で秋を感じる事が多いと思いますが、北京の果物は、日本より収穫の時期が長いようで、秋になって特別果物が多くなる事はありません。桃などは、6月末から出回り始め、未だに売られています。さすがに一時期よりは少なくなりましたが、スイカもまだ売られています。これは、中国の国土が東西南北に広がって、流通が発達した今日では、特に驚く事でもないでしょう。

この桃、日本とは少し様子が違います。勿論、桃を縦に潰した様な平べったい桃もありますが、それとは別に、形は日本の桃と全く同じなのに、少し違うのです。何がどう違うかと言うと、中国の桃は、固くても甘みがあるのです。日本では、昔、果物屋さんの店先に、「桃を指で押さないでください」なんて張り紙がしてありましたけれど、桃は柔らかいのが美味しいので、つい押しつけて調べたくなります。柔らかくないと、歯触りがガリガリで、甘味も少ないものが多いですから。ところが、北京の桃は、硬くても、噛むとしっとりして、甘味も十分にあるのです。特に硬いのを避けなくても、十分美味しくいただけます。一番初めにこの桃を頂いた時は、硬いので、美味しさを期待しなかったのですが、口に入ると、ちょっと歯応えがあって、しかも日本の柔らかい桃と同じように美味しかったのでビックリしました。因みに、中国の方は、果物の皮は剥かずに食べます。値段は、高い所で1斤(500g)2.5元、安い所で3斤(1.5kg)5元でした。

北京の果物は何時も豊富ですが、季節で中身が変わります。9月になると、桃が少なくなり、暫く前から出始めた葡萄や梨、リンゴが多くなります。先日は、ピン

ポン玉くらいの、赤いみかんのような形をした柿を始めて見ました。暫くすると、富有柿のようでいて、高さの中ほどに括れがある柿が出てきます。中国の柿は、量も少なく、色もあまり美味しそうではないので食べた事はありませんでしたが、あのピンポン玉のような柿は、色も形も食欲をそそるもので、機会があったら食べて見たいと思いました。

秋の主役は、なんと言っても、焼き芋と甘栗です。北京の焼き芋屋さんは、自転車の横にドラム缶を積んでやって来て、街角で売っています。ドラム缶の中では薪が燃えていて、お芋はその中に入れて焼きます。そばを通るとほわっと暖かく、いい匂いがします。大学やバス停の回り、歩道橋の付近には必ず見かけるようになりました。ただ注意しないといけないのは、出かけた折、行きがけに家の近くで見かけて、帰りにあの人から買おうと思い、途中買わずに帰ると、目当ての焼き芋屋さんはもういないと言う事がしばしばです。道路上で物を販売する事は正式には禁止されているようで、公安などが取締りを始めると、さっといなくなってしまうです。でも、暫くするとまた違う人が売っています。繁華街で、通行の妨げになる事もあるので、ある程度の取り締まりは必要でしょうが、これらのお店が全くなくなってしまったら、町を歩くのがつまらなくなります。邪魔にならないお店は大目に見て欲しいと思います。

さて、この焼き芋がまた、日本と少し違うのです。日本のは、ホクホクしているのが美味しく、急いで食べると喉を詰まらせそうになりますよね。北京のは、赤みが濃い黄色で、ねっとりしていて甘味がとても強いのです。皮が火脹れを起こした下には、ちょっと焦げ目の付いた、半透明のお芋があって、なんともいえない歯触りと香りと甘味を楽しめます。これはお芋の種類によるのでしょうか。

一度、日本からの仲間と九寨溝へ行った帰りに、成都で、「中国の焼き芋は美味しいから」と前宣伝をして買ってみたのですが、私がイメージした美味しさではありませんでした。成都のは、日本的な美味しさでした。私としては、「秋刀魚は目黒に限る」と同じで、「焼き芋は北京に限る」と言う心境で、北京の焼き芋を是非食べて欲しいと思いました。

今年、北京の焼き芋は、大体1斤3元が相場だそうです。かなり大きなお芋でも、100円以下で食べられます。特別美味しいのにあたるかどうかは、貴方の運次第です。

環境が子供の教育に与える影響は見過ごせません。そんなわけで学校近くでの風俗営業は許されませんし、公共の教育施設はできるだけ環境のよいところが選ばれているのではないのでしょうか。

子どもの学校選びに慎重な親たちが多いのも子ども達の学ぶ環境がよりよくあってほしいという願いもあるでしょう。事情が許されるならよい学校やよい環境の中で子ども達を育てるために引越しをしたいと思っているのかもしれない。

実は中国紀元前、多くの思想家が現れた戦国春秋時代(前770～前476年)、教育にとって環境が大切なことを早くも理解し実践した母親がいました。最近はあまり耳になくなりましたがひと昔前まで「孟母三遷」という言葉をよく耳にしました。今回はその「孟母三遷」について紹介したいと思います。

先ず、辞書にはどのように載っているのでしょうか。

三省堂「現代国語」は、

[孟母三遷(の教え): 教育には、環境が大切であることの教え。むかし中国で、孟子(脚注)の母が、孟子のために、教育にふさわしい、よい環境を求めて、三度住居をうつしたことから。]と、ありました。

小学館「中日辞典」には出てこないのですが、中国上海辞書出版社の「成語辞典」には次のように載っていました。

[孟母三迁: 孟轲的母亲为了选择良好的环境来教育孩子, 先后搬了三次家。后来就用“孟母三迁”作为慈母教子的典故。]

(原文) — 孟軻(孟子のこと 軻はおくり名)の母は、子供の教育に良好な環境を選択するために、相次いで三度引越しをした。以後、慈母の子供の教育の故事として、“孟母三遷”が用いられるようになった。 — (筆者訳)

出典は列女伝^{れつじょでん}*です。

孟子は幼いころ、家が墓地の近くにあったので、いつも葬式ごっこばかりして遊んでいました。それ

を見て孟子の母は「こんなことばかりして遊んでいるのでは、ここは子どもによくない。」と、市場のそばへ引っ越しました。すると孟子は今度は商人のまねをして、商売ごっこをして遊ぶようになりました。母はそれを見て「ここも子どもによくない。」と今度は学校のそばに引っ越しました。すると孟子は学生

がやっている祭礼の儀式や、礼儀作法のまねをして遊ぶようになりました。母は「ここならよい。」と安心してそこに住みつきました。やがて孟子は成長すると、六経を学び、後に儒家を代表する人物となったのです。

ところで、“教育ママ”という言葉があります。子供に幼いころからいろいろな習い事をさせたり、学校に入ると、家庭教師をつけたり、塾へ通わせたりなど、教育熱心な母親を指して言うようです。

確かに“教育ママ”も子供の教育に熱心な母親に違いありませんが、孟母とは少し動機が違うように感じます。“孟母三遷”は自分の子供が、立派な大人になって、人様の役に立つようになって欲しいという気持ちから、小さい時から学ぶ環境を整えるための布石だったと思うのですが、“教育ママ”の方は、親の見栄が見え隠れしていたり、自分の子供の将来だけを案じる親のエゴを感じてしまいます。そうせざるを得ないような時代の風潮もあるかと思いますが皆さんは如何思われますか。

〈注記〉

孟子: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) より (紀元前372年? ~ 紀元前289年) は戦国時代中国の儒学者。姓は孟、諱(*)は軻、字は子輿。あるいはその言行をまとめた書を指す。儒教では孔子に次いで重要な人物であり、そのため儒教は別名「孔孟の教え」とも呼ばれる。性善説を主張し、仁義による王道政治を目指した。

*諱: 本名のこと

*列女伝:

中国の伝記。7巻。漢の劉向撰。古代から漢代に至る中国婦人の賢母・烈婦など100人あまりを集録し、その略伝や図説などを付した。「古列女伝」ともいう。

【私が調べた四字熟語

16】

孟母三遷

(もうぼさんせん)

三澤 統

もの知りノート(3) 呉音、漢音、唐音について

岡村景孝

日本における漢字の読み方は音読み、訓読みとあり、また音読みでも何種類かに分かれていて、それぞれに時代背景があり、非常に興味深いものがあります。調べた範囲で述べてみましょう。

1. はじめに

日本の漢字の読み方ほど種類の多く分かれている言葉は少ないでしょう。日本語を学ぶ外国人を非常に悩ませる大きな要因になっているようです。外国人ばかりではなく日本人にとってもやっかいな問題なのです。

例えば、「生」の字は「せい」「しょう」「いきる」「うむ」「はえる」「なま」「き」があり、「相生(あいおい)」「桐生(きりゅう)」「羽生(はにゅう)」や「羽生、土生(はぶ)」など固有名詞まで含めれば大変な数になります。

漢字の発音には大きく分けて「音読み」と「訓読み」があります。もともと日本には文字がありませんでした。そこで中国の文字を採り入れて、その意味を和音で表現したのが「訓読み」です。いわば漢字にやまと言葉を当てはめ翻訳したもので、従って上記のように複数の読み方があるのです。

「訓読み」は必要に応じて「送り仮名」をつけます。中国の文字を採り入れると同時にその発音もそのまま使うということもありました。これが「音読み」です。

しかし日本語の発音の音韻は中国ほど多くなかったため、日本式の音韻を採用したということもあり、いわば日本なまりというか、本来の中国の発音とは違っている面も多いのです。

音読みは大きく分けて「呉音」、「漢音」、「唐音

(宋音)」と三つに分類されます。これらは日本に導入された年代、また中国のどの地域から導入されたかによって分けられます。「呉音」、「漢音」、「唐音」の順番に導入されたのです。現在の中国の標準語は北京を中心とする北方方言が基準とされていますので、これら(呉音、漢音、唐音)は今の中国語の発音とも異なります。

2. 呉音について

まず最初に日本導入された言葉は呉音であるということは、間違いのない事実のようです。

中国には八つの発音の系統があるといわれます。即ち、呉、湖南、江西、広東、福建南、福建北、客家、北方の八つの言語系統(方言)です。それぞれの方言は地域によってまた少しづつ変化があります。西安(長安)も一応地域的には北方方言に属します。台湾は対岸の福建南の言葉が海峡を越えて伝えられています。

呉音がいつ導入されたかということについては次の諸説があり、定説とされるものは未だありません。

一番古くはBC5世紀呉越の戦いで呉が滅びて、呉の人たちが日本に逃げのびてきたとする説が最も早いとする説でしょう。(‘わんりい’「呉音の伝来」/2007年1月号を参照下さい)

次に古いとされる説は秦の始皇帝の命を受けて不老長寿の仙薬を探しに「徐福^{じょふく}」が日本に来た際(これは伝説ではなく事実のようです。揚子江の南である呉の地域から出発したので呉の言葉を話す人々を多く連れてきたとする説です。

三つ目の説は、仏教は朝鮮半島を経由して日本に伝来したのですが、その朝鮮半島には呉の地域から伝来したので、仏教と同時に呉音が日本に伝来したとする説です。仏教用語はほとんど呉音で読まれているというのがこの説のよりどころになっています。

中国の南北朝時代、南朝との交流で朝鮮半島に呉

音が入ってきたといわれていますが、しかしながら地理的には北朝の方が近いのです。さらには、法隆寺の仏像は北魏の雲崗(うんこう)石窟にある様式と同じといわれています。また、日本から北魏に使者が来たとする記述が中国に残っていますし、朝鮮半島を經由してかどうかは別にして北朝との付き合いもあったとするのが普通の見方でしょう。朝鮮半島経由の呉音の伝來說には賛成しかねます。

四つ目の説は、三国時代(即ち魏、呉、蜀の三国志の時代)の呉の国から伝来したとする説です。

以上を総括して、さかのぼって別の観点から検証すると、BC5世紀が日本の古代史の中で縄文時代から弥生時代への移行の時期とするのが最近の定説となっていますが、縄文時代と弥生時代を区分する大きな出来事は何かというと、それは「水稻の伝来」なのです。

水稻は揚子江の下流、即ち呉の地域から伝来したというのが定説になっていますから、水稻だけでなく同時に呉の言葉も伝来したと見るのが最も自然な見方なのではないでしょうか。

更に「徐福」が連れてきた呉の人たちが呉音の定着に力を貸したと見るべきでしょう。従って、私は呉音の伝来は非常に早かったと見るのが妥当だと考えます。呉音と仏教との関連については、日本において呉音がある程度定着しているところに仏教が導入された、従って仏典など仏教関係のものは当初から呉音で読まれたという解釈を採っています。

3. 漢音について

中国では南北朝の後、隋によって統一され、更に唐という中国の歴史上で最も繁栄した時代を迎えます。日本は遣隋使、遣唐使を送り(併せて6000名に達したといわれる)、中国の国家制度や文化を積極的に採り入れました。

この時代の都は長安・洛陽です。長安・洛陽は江南から遠く離れた内陸です。この地方の発音を漢音

といいます。

呉音を勉強して行った遣隋使や遣唐使はさっぱり言葉が通じません。そこで、日本政府は、遣唐使達に漢音の勉強をするとともに、法令や書類の読み方は漢音で統一するよう指示を出したのです。このあと中国語の読み方は漢音が主流となったのです。しかし、仏教の関係者は今まで慣れ親しんだ呉音を簡単に漢音に変えるわけには行かなかったのです。

これによって官庁や学者は漢音、仏教は呉音という区別が生まれました。江戸時代の後期には次のように使い分けられていたようです。

儒教 → 漢音、仏教 → 呉音、和歌・国学 → 呉音、詩文・雑書 → 漢音・呉音

4. 唐音(宋音)について

宋、元、明、清時代の中国音を伝えたものの総称。禅僧や商人などの往来に伴って南のほうの発音が伝えられた。漢音とちがって唐音(宋音)は体系的なものではなく、非常に部分的です。

表 呉音、漢音、唐音、現在の中国標準語の発音の例

文字	呉音	漢音	唐音	北京標準語
明	ミョウ 明星、灯明	メイ 明暗、黎明	ミン 明朝体	ミン ming
行	ギョウ 行事、苦行	コウ 行動、励行	アン 行脚	シン xing
京	キョウ 京都	ケイ 京浜	キン	ジン jing
暖	ナン	ダン 温暖	ノン 暖气(吞はあて字)	ヌアン nuan

(参考文献) インターネットフリー百科事典「Wikipedia」

尚、徐福についての参考資料としてインターネット上の「古代史の扉」(<http://www.asukanet.gr.jp/tobira/>) に沢山資料があります。古代史の扉をクリックして「徐福」のページを参照下さい。(岡村景孝)

大草原を駆けめぐる gaucho の記憶.....

(アルゼンチン 2)

嘉陽ひろこ

日曜日のセントロは、歩行者天国で、骨董市民芸品土産物等々の出店やストリートパフォーマンスも楽しいよ、と聞いただけでも心が踊る。人込みにもまれながら、日本の友人たちに土産を買った。マテ茶を飲むためにひょうたんをくり抜き彩色した容器と金属製のストローがセットになっている。売り子のおじさんは小刀一本で、ひょうたんに名前を刻んでくれた。マテ茶はアジアの茶とは違いジュエルバ マテと言う木の葉を乾燥させて細かく砕き、容器にたっぷり入れて熱湯を注ぎストローですする。日本茶に似ているがひなた臭い郷愁にも似た味だ。

このマテ茶と切っても切れない男たちが、gaucho (カウボーイ) だ。つば広の帽子をかぶり、ダブダブの乗馬ズボンにお手製のブーツ、大草原(パンパ)を自由に駆け巡り無骨で荒々しく束縛を嫌い勇猛で自由奔放、簡素に生きた彼らの手には必ずマテ茶の容器がにぎられているのだ。

「サン・アントニオへ行きましょう!」とKが言った。ブエノスアイレスから北へ120K、「荘園」と言う。ブエノスアイレスに到着して3日目に、エアーカナダの職員が届けてくれたリュックから一泊用の着替えと洗面用具を取り出し、デイバックに詰め、喜々としてKの夫の車に乗り込んだ。昼過ぎに『ラ・シナシナ』という荘園に到着。草の匂いとバンドネオンのメロディ、若いgauchoが白いワンピースを着た娘とフォークダンスに興じている。

夏休みと新年の休暇をこの荘園で過ごす子供連れの家族が、彼らをぐるりと取り囲み笑顔で拍手している。我らは、その横を通りぬけツインのベッドハウスへ案内してもらった。どこからかあひるが列をなして歩いて来去り、鶏は草むらに餌を食んでいる。猫ははるかに自由だ。ここは草原の一角を観光客やリゾート客に解放し、パンパに生きるgauchoの生活の一部を紹介しているのだ。

「gaucho文学」の傑作といわれる『マルティン・フィエロ』の作者ホセ エルナンデスは、かつての楽園であったパンパを追われるgauchoの悲哀を描いた。独立軍に加わり王党派打倒に一役買った彼らは、19世紀後半ヨーロッパ移民の増加により欧化主義者が政権に就くや、パンパは有刺鉄線が張り巡らされ、政治的にも社会的にも

締め出されていった。

また、gauchoとは別の「クリオージョ」と呼ばれるアルゼンチン生まれのスペイン人を忘れてはならない。1816年、独立宣言に至るまでの、また独立してからも苦難の歴史を歩むアルゼンチンの歴史に彼らの存在があるのだ。植民地の行政経済はスペイン生まれのスペイン人に独占され、ラ・プラタからの貿易は厳しい統制を受けた。すべての権益から除外された彼らには解放意識が芽生えていった。

1806年大英帝国軍はラプラタ川地域への侵略を企てるが、クリオージョ軍は二度にわたって撃退、独立への機運は高まっていったのだ。gauchoとクリオージョは、この国の独立の「魂」となっている。

Kの夫は、メキシコ国立大学で「中南米文学」のドクターを取得している。その彼がgaucho文学の舞台となった、この地の橋を観に行くという。日没にはまだまだ早いアルゼンチンの夕刻、ピンクに塗られた眼鏡橋は歓声と共に水飛沫が上がる子供たちの、格好の水遊びの場になっていた。

サン・アントニオの荘園の帰路、ラ・プラタの支流の川の中洲へ行った。50代後半と思しきマルガリータ女史が一人で経営するホテルとレストラン、ここもK夫婦の行きつけの「店」なのだ。その中洲の島への往復はボートを利用する。復路のボートの時間まで、庭に吊るされたハンモックで昼寝をした。

1976年から77年にかけての1年間、当時の軍政権に反対する若者3万人余りが蒸発するという事件が起きた。現在もその消息は不明。Kは「憶測だが...」と前置きし、かのマルガリータ女史はその頃スペインへ亡命し、国情安定とともに帰国、あの小さな中洲で数匹の犬、猫、ヌットリーに囲まれてひっそりと生活しているのでは...という。ブエノスアイレスの中心地五月広場は、現在も蒸発した若者の母親たちの抗議と慰霊の集合場所となっている。

「アルゼンチンの歴史を知るには、これが一番!」と、Kが豪語した野外劇『ラパンパ』は夜空の下で始まった。征服者の騎馬隊によって蹂躪されるインディオ グアラニ一族、パンパを我が故郷として駆け回るgaucho、そして独立戦争。20数頭もの俳優馬の名演技に拍手喝采!

クリオージョやgaucho、娘たちの群舞、美しくも悲しいバックミュージックの大音響と七色のサーチライトに照らされ、真夏の夜の夢は過ぎていった。

岩陰に咲く青いケシ

この青いケシ (*Meconopsis horridula*) の写真は1991年8月に初めて私が四姑娘山へ来た時に撮影したもので、当時この青いケシは大姑娘山の高所キャンプの直ぐ横に有る大きな岩の上で、辺りを見回すかのように綺麗に咲いていました。しかし現在では周辺の株を含めて誰かに持ち去られてしまい、残念ながら昔の綺麗な姿を見れなくなっています。

昔、青いケシは標高の高いヒマラヤ山中やチベット高原で、しかもモンスーンの最中にしか咲かないため、幻の花と言われていました。私が1985年8月にチベット高原南縁のティンリ高原4400mで何処までも続く青いケシの群落を初めて見て歓喜したのもそんな時代でした。ただ私が見たこれらの青いケシは乾燥して赤茶けた砂礫の上に這うように咲いていて美しくありませんでした。

しかし私は此処で初めて青いケシに興味を持ち、姿の美しい青いケシを撮影しようと思うようになり、後年、四姑娘山を訪れる事になったので

す。そして前述の写真の青いケシを撮影した訳です。

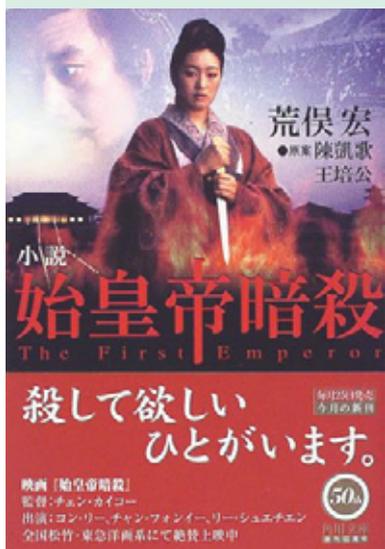
更にこの青いケシがきっかけになって、その後私は四姑娘山で他の花や山岳風景を撮影するようになり、2000年6月からは四姑娘山に住み着きました。



岩場に咲くブルーポピー

中国を読む (45) 「始皇帝暗殺」 荒俣 宏 案：陳凱歌 / 王培公 角川書店

始皇帝のような人物はクリエイターの心をくすぐるのだと、しみじみ読後感じる。



始皇帝暗殺については、「史記」に迫力満点の記述がある。暗殺者荊軻がくると地図を広げると、最期に匕首が出てくる、そして秦王に切りつける場面だ。短い文章が続き、ぴんと張り詰めた異常な緊張感のなかを秦王と暗殺者が対峙している空気感が伝わる。秦王がようやく剣を抜き、荊軻が倒

れたとき、読者は息を詰めていた自分に気が付く。あと一步のところ、始皇帝暗殺は失敗する。

裏舞台まで想像を広げると、小説が生まれる。本書では、暗殺は、秦王の恋人・趙姫が、秦が燕を攻める口実を作るため計画したことに。秦王は、恋人を燕へ

送り、自らの暗殺者を待つ…という構図だ。始皇帝の暴走や、それに付いていけなくなった趙姫の心変わりなど、物語は移ろいその構図は崩れてゆく。気弱なゆえに、自らの暴走を止められず、天下統一を押し進める始皇帝の姿は新鮮だ。天下統一と共に彼に付きまとう悪行の数々は、彼の弱さゆえ、自分の安泰を崩す可能性のあるものをすべて消してゆかなければ不安でいたたまれない、というところに由来する、という作家の解釈は案外真実に近いのかもしれない。

始皇帝が腹違いの第二子を殺すシーンは印象的だ。母親が秦王の代わりに弟を皇位につけるための謀反を起こしたための殺害。年端の行かない男の子二人は麻袋に入れられ、床に叩きつけて殺される。母親は絶叫するが、始皇帝は冷静に、こう母親に語りかける。「二人のうち、どっちをわたしに代わって王にするおつもりだったのですかな？ 大きいほうですか？ それとも小さいほう？」

ここが小説の面白いところで、母親に裏切られた秦王の絶望が静かに伝わってくる。教科書のなかの一人物でしかなかった始皇帝が、温度を持ち動き始める。

(真仲智子)

5,000m峰に立つ

—大姑娘山登頂記—

岩田温子

今年の8月3日午前9時、とうとう私たち5人は大姑娘山の頂上に立つことが出来た。

山登りの好きな人間ならば、たいていの人は更に高いところへ行ってみたい、そこからの景色を楽しみたいと思うだろう。しかし、国内の、標高が1,000 mを少し越えるぐらいの山を年に1～2回登る程度の私にとっては、海外の5,000 m峰は、ヒマラヤのエベレストも同様の、とても登れる高さではなかった。ところが、去年の夏、わんりいのメンバーによる大姑娘山登頂が行われ、その記録を読むにつれ、〈ひょっとして私にも登れるかも〉と高望みと妄想が膨れ上がり、拳句にメンバーを募り登山を試みることにした。そして、なんと「登ってしまった」。

病人と年寄りばかりの軟弱者のパーティー、酸素ボンベをかかえての登山だったが、頂上についてみればすっかり息苦しさも飛び、喜びの大歓声を上げるばかりだった。そのときの登山のありのままの様子を書いてみたい。

大姑娘山は中国・四川省・横断山脈の北東部、四姑娘山塊の中にある。四人姉妹のなかで一番のお姉さんが標高は5,025mと一番低い。でもたった25 mとはいえ5,000mを越えた高さは登る者の虚栄心を大いにくすぐってくれる。「なんとといっても5,000m峰！」

▲▽高度順化

私たちが日本を出たのは7月25日。途中、康定、丹巴へ寄り道をして高度順化をはかりながら四姑娘山入り口の日隆(3,200m)へは7月29日に到着をした。翌日も高度順化とフラワーウォッチングをかねて夾金山(4,000 m)へハイキング。31日は3,800mの花海子へ移動し、キャンプをしながら8月1日は更に標高4,300mまでハイキング。8月2日、いよいよ大姑娘山登山のための高所キャンプ場(4,400m)へ移動。そこで一泊した。

花海子から高所キャンプまでは5人のうち4人が荷物を馬に預け、空身ながら徒歩で登って行った。残る一人(実は私)は疲れと冷えからか、それとも高山病の影響がずっと下痢が続いていたので、体力温存のために馬で登った。これまでかなり高度順化のためにゆっくりと時間を掛けて上がって行き、高山病予防のための薬「ダイアモックス」も29日ごろから飲んでいたのに、やはりこの高さまで来ると「発熱」、「食欲不振」、「下痢」など5人全員がなんらかの高山病の影響を受けていた。しかし症状は軽いものなので全員が明日の登頂を目指し、早々と寝袋に入った。

▲▽登頂

8月3日、午前5時30分起床。晴れ。夜中に星を見るた



花海子キャンプ地から高所キャンプ地へ移動する



高所キャンプ地にテントを張る

めに起きていた人、トイレに通った人、寒さのために良く眠れなかった人など、皆が充分睡眠を摂っていない。さらに食欲不振、腹痛などで朝食をパスした人が3人ほどいた。昨夜発熱をしていた人はバファリンを服用したおかげで熱が平熱に戻った。全員の体調がベストコンディションではない状態で、6時に出発。

出発前に血中酸素濃度を測ってみると、U氏はなんと93%を現していた。平地でも普通99～96%が正常なので、この数値は凄い！ついで、私が90%。まあまあ高山病の心配はないようだ。残りの3人は皆85パーセント前後の数値を示し、高山病にかかっている証拠。これから先、さらに高度が上がってゆくと体調がどうなるかという心配があったが、私たちの登山には一人一人にポーターが付き、荷物も運んでくれるので、いざ病状が悪化した場合は急いでポーターに付き添ってもらっての下山が可能のため、とりあえずは頂上を目指して歩き出した。荷物はすべて同行のポーターが背負ってくれて、私たちは全くの空身。深く大きな呼吸をすることを心がけながら、ゆっくり、ゆっくりと上って行く。およそ30分毎に10分間の休憩を摂ったが、それ以外のときにも時々高山病にかかっている人たちが携帯酸素ボンベから酸素を吸入したり、「食べる酸素」

というタブレット状のものを口に入れたりして、ちょこちょこ休みながら登っていった。頂上付近は全体にスレート状の石で覆われていたが、登山道はよく踏まれていたので案外に歩きやすかった。途中で私たちよりも先に出発していた日本の元気なオバ様たち8人のグループを追い越してしまっただけで、彼女達は何故か大きなザックを背負い、天気は晴れだというのにザックカバーまでしていた。きっと山で起こりうるあらゆる事態に対応できる装備をしていたのだろう。行動食と水とカメラぐらいしか入っていない小さなザックさえもポーターに預けている私たちは、正しい登山家としての道を行く彼女達のパワーに押され、ちょっと引け目を感じてしまい、追い越すときに何故か「病人と年寄りばかりのグループなので」と言い訳をしてしまった。

そんな軟弱者のパーティーだったが、山頂にたどり着いたのは出発してから2時間40分後の午前8時40分。山頂には幸いにも

他のパーティーは居らず、しばし私たちだけで独占。すぐ目の前に白い雪に覆われた主峰の四姑娘山(6,250m)があり、はるか彼方にはミニヤコンガ山の白い頂が見え、やはり5,000m峰ならではの眺めの素晴らしさをただじっと見ているだけだった。

頂上には30分ほどただけで、9時10分に下山を始め、午前10時40分には高所キャンプに戻った。登頂を開始してから4時間40分でキャンプ場に戻ってきたのは結構早いペースだったと登山ガイドの明銘さんに言われ少々驚いた。それからテントの撤収を始め、昼食をとった後、下山は膝を痛めるからと大川さんのご配慮で、手配をされた馬に乗って一気に日隆まで降りていった。

▲ 天の声

下山後、今回の旅の一切のお世話をしてくださった四姑娘山自然保護管理局・特別顧問である大川さんに「こんなに簡単に5,000m峰に登れてしまって、これでいいんでしょうか？」と心の中の疑念を漏らしてしまった。すると大川さんはにっこりと笑顔で「山は楽に登れるならそのほうがいいですよ」とおっしゃる。大ベテランの登山家としての重みある言葉にすっかり元気づけられ、頭の中では早くも地図が広がり、次に楽に登れそうな5,000m峰を探す始末となった。

▲ 振り返ってみて

今回、大川さんから高度順応のために中国へ出発の1

～2週間前に富士山に登ることを薦められていた。しかし、60代半ばのU氏が出発の3日前に果たされただけで、その外の参加者は誰も富士山には登っていなかった。U氏は大姑娘山登頂の前日までお腹の調子が良くないということで薬を飲まれていたが、高所キャンプ場での夕食はちゃんと摂られていた。その日、3,800mの花海子から4,400mのキャンプ場までは歩いて上がられたが、別に辛いと感じることはなかったそうだ。登頂の当日に起床してすぐ血中酸素濃度を測ったときに、U氏は93%とい

う驚くべき数値を示していたことは既にも書いた。このときにはもうお腹の具合も完全に治っていて、朝食も摂られていた。そして、メンバーの中で一番元気に大姑娘山に登られた。山頂へ向かうときも、少しも苦しいことはなかったそうだ。

私たち一行は成都に到着してすぐに四姑娘山域に入るのではなく、別な地域の観光目的と高度順

応のために寄り道をし、少しずつ高度を上げ、予防薬を飲みながら来たが、それでも高山病にかかってしまった人が何人か出た。四姑娘山域に到着するまでに悪路を長時間やってきたということや天候不順から疲れが出たことも原因としては否定できない。

私たちのように体調不十分の人間が5,000m峰に無事登って、下りてきたということは実はとても幸運なことかもしれない。登る2日前から天候が回復し、当日は抜けるような青空が広がっていた。高所キャンプ地からわずか625mの標高差といっても、雨がぱらつき、冷たい風が吹いていたなら、この体力で果たして頂上にたどり着けていたのだろうか。そして、ありがたいことは大川さんが長年のつきあいから信頼をおける若者達を一人ひとりに選んでくれ、荷物を持ってくれるポーターとして、また上り下りでもたつくとさり気なく側に立ってサポーターとして助けてくれた。いざ体調が悪くなれば、皆に迷惑を掛けることなく、隊列を離れ、ポーターとその場で待機するなり、キャンプ場まで降りてくればいいという安心感は大きなもので、格別の不安もなく頂上を目指すことが出来、無事に下山できた。

(写真撮影：岩田温子)

● 付記：登山中の行動時間に関しては浦木祀子様の記録を参考にさせていただきました。



白銀の四姑娘山を背に記念撮影

宿に戻ると隣の部屋のドアが開いていて明かりが漏れていた。なんだ、他にも宿泊者がいたんじゃない。全く人気が無いように思われたのは宿泊者が出かけていたからのようで、いくつかの部屋の窓にもいつの間にか洗濯物などがかけてあった。

隣の部屋では若い女性が山から戻ってきたばかりの様子で、濡れた合羽などを干している。きっと亜丁に行っていたのに違いない。それなら亜丁の様子を聞いてみたいと思った。過去の記憶だけを頼りにやみくもに此処まで来てしまったが、現在の様子や高山ではオフシーズンに差し掛かっているこの時期に、宿泊施設など開いているのが不安だった。前回訪れた時には殆どの中国人観光客は亜丁の入り口で馬に乗り、景勝ポイントまで往復するだけで満足して日帰りしている様子だったが、三年間想い焦がれてやっと此処まで辿り着く事ができた私は、日帰りなんかじゃ到底満足できないのだ。夜間になれば真夏でも10度以下に気温が下がる亜丁に滞在する為、ダウンのシュラフやジャケット、ズボンまで背負って持ってきていた。最悪泊まる場所が無ければ「野宿してやる!」くらいの意気込みはあったが、できればそれは避けたいものだ。

「你好!! 亜丁に行ってきたの?」

「そうよ、さっき戻ったばかりなの。友達は食事に行っているけど、私は疲れちゃったから先に帰ってきたのよ。」

彼女は上海から来ている旅行者だそうで、感じ良く会話に応じてくれた。私が懸念していた宿泊施設も、彼女の話ではどうやら泊まれる場所があるらしい。彼女が携帯電話で撮った写真を取り出して見せてくれた。

「とーっても綺麗な湖があるの」

ああ! それはまさしく三年前に私が見た宝石の湖だった。

あまりに何度も思い描き人に語るうち、私の心の中でどんどん美化され幻の様に思えていた湖だ。今回これほど亜丁にこだわり再訪を願ったのは、その幻の湖の存在をもう一度確かめたかったというのが一番の理由だった。それが自分の足で訪れる前に、あっさり携帯電話の画面で確認できてしまったというのは、私が思い描いていたドラマチックな展開とは非常に異なっていたのだが、やはり湖はそこにあったのだ。そんな私の胸中を知る由もない彼女は「亜丁の宿の食事はとって高くて不味いのよ!」と顔をしかめてみせた。



翌日目が覚めると先ずシャワーを浴びた。亜丁には何日かいるつもりだったので、次に稲城に戻るまで当分の間身体を洗う事ができなくなってしまう。これが当面の洗い収めとばかりに時間をかけて髪も身体もゴシゴシ洗った。

昨日まとめておいた不要な荷物は青年旅舎の事務所に持って行き預かってくれるように頼むと、例の女の人が部屋の隅をアゴで指した。どこまでも感じ悪い宿だ。もう二度と泊

まらないぞ~!

日なたをブラブラしながら洗った髪を乾かし、タクシードライバーのお兄ちゃんを待ったが、約束の8時になっても現れない。このような土地では時間に正確な方がめずらしい事なので気楽に待っていたが、昨日約束した私の言い値があまりに安いように思えたのが、ちょっと不安だった。あれで私以外の乗客が見つからなければ赤字だろうし、もっと良い客が見つかったりしたら彼はあっさり予定を変更するだろう。

8時半をまわり、やっぱりすっぱかされたかなあ~と思われ始めた頃、旅舎の敷地に見覚えのある車が乗り込んできてドライバーのお兄ちゃんともう一人の男が降りてきた。

「待ってたよ~!! もう来ないかと思っちゃった!!」

笑顔で駆け寄る私に、お兄ちゃんは何だかバツが悪そうにモジモジしていてどうも様子を変だ。案の定、口ごもりながら「今日は行かないんだ」と言い出した。

「はあ!」

喜んだ後の落胆の大きさと、とたんに私の目も吊り上がる。

「昨日何度も約束したでしょ!? 何で今さらそんな事言うのよ!!」

申し訳なさそうに誤るお兄ちゃんを陰しい口調で問い詰めるが要領を得ず、それを見かねた様に彼の代弁をする連れの男の言葉を何度も聞き返すうちに、今日は警察が怖いから行かないんだと言っているらしいのが判った。

「はあ~!? 警察!? 警察なんて関係ないでしょう!」

どうせ他のお客が見つからなくて、赤字だから走りたくないっていうのが本当のところには違いない。私の剣幕に恐れ入ってモジモジしているお兄ちゃんと連れの男は苦し紛れに「あの人達の車で一緒に行けばいい!俺が交渉してあげるから!」と、ちょうどその場で出発しようとしていた、マイカーで来ている中国人の宿泊客をつかまえると

「なあ、亜丁に行くんだろ? ついでに彼女も一緒に連れて行ってやってくれよ」

と頼み始めた。たまたまその場にいただけで何の関係も無い中国人旅行者は、あからさまな迷惑顔で「車の定員がいっぱいだから乗せられない」と答えている。

「詰めれば一人くらい大丈夫じゃないか! 乗せてあげたっていいだろう~!」

「いや、これ以上乗れないよ」

「ケチな事言うなよ、女一人くらい乗せられるさ」

「無理だって言ってるじゃないか! 定員なんだよ!」

いきなり見知らぬ女を乗せろと田舎のタクシードライバーにからまれてしまった気の毒な中国人も彼らのしつこさに語気を荒げ、私を置き去りにしたままその場で押し問答が始まってしまった。何なんだ、この展開は。

「ちょっと待ってよ~!!! 私はそんな事頼んでないでしょう

!?勝手に交渉するな〜!!

「だって垂丁に行きたいんだろ!？」

「見知らぬ他人に迷惑かけてまで行きたくないわよ!」

「迷惑だとは言っていないだろ!満席なんだから仕方ないじゃないか!」

それぞれが大声で自分の主張をはじめ、三つ巴の口論が始まってしまったところで、なんだか可笑しくなってしまった私はそれまでの怒りが急速に萎んでしまった。

理由はどうあれ、ちゃんと私に断りを入れるために此処までやってきただけでもお兄ちゃんはまだ誠意がある方だろう。今まで旅してきたアジアの国々で、このような約束を何の連絡も無くすっぽかされた事は何度もあるし、たぶん私に申し訳なくて一人ではやって来れずに仲間まで連れて謝りにきたのかと思うとちょっと可愛くもあって憎めなかった。それより何より彼には昨夜夕食を奢ってもらっているという弱みもある。

「もういいよ。今日は稲城で遊ぶことにするから」

ついムキになってしまったのだが、考えてみれば別に急いでいる旅ではないのだし、本来なら今日は成都に戻るバスに乗るため、自分が断りを入れなければならなかったかもしれないのだ。あまりでかい顔して彼らを責めるのも考え物なのだ。

マイカー旅行者達は「乗せてあげられなくて悪かったな!本当に定員いっぱいなんだ」と言い訳(?)しながら出発し、タクシードライバー達も「ごめんね。他の車を探してよ」と謝りながら帰っていった。一人取り残された私は何だか力が抜けてしまった。昨夜からの事を考えるとまったくジェットコースターに乗っているような浮き沈みだ。これから今日一日をどう過ごすか…とりあえず朝ごはんでも食べに行くか。旅舎を出て街の中心に向かって歩いているうちにだんだん楽しい気持ちが戻ってきた。そんなに急いで垂丁に行く事にこだわらなくても良かったじゃないか。この稲城の街だって目的地の一部だったのだ。昨夜は既に暗く店も閉まっていたので、まだ街の様子は殆ど見ていなかった。



何を食べようかな…ブラブラ歩いてみるが、この辺りの土地にどんな食べ物があるのか良く判らない。一人だと結局、麺か餃子くらいしか思いつかなくて、再び道の脇にあった小さな餃子のお店に入ってしまった。さすがに三度つづけて水餃子では芸がないと思い、店員のお姉さんに「焼き餃子はできる?」と聞いてみたのが通じているのかいないのか、忙しそうなお姉さんは他の客ともやり取りしながら「はいはい、餃子ね」と答えただけだ。念を押すためもう一度「注文は焼き餃子だよ!」と大声で言ってみたが、私の不明瞭な中国語が聞きとれなかったのか、彼女は返事をせずに奥に入って行ってしまった。

宙に浮いてしまった自分の言葉を照れくさく思ったその時、「お姉さん!!彼女の注文は焼き餃子だよー!!」店の奥に向かって大声で叫ぶ声がした。隣に座っていたカップルの

男性だ。目を上げると二人がニコニコしながら私を見つめていた。

「ありがとう」

「君は何処の人?」

「日本人」

「そうか!少し中国語が話せるんだね。俺たちも旅行者さ。香港から来たんだ」

どうりで二人の様子はどこか垢抜けていた。二人ともフレンドリーで親切そうだ。無事に「焼き」で運ばれてきた餃子は望んでいた物だけあって美味しかった。

店の通路を挟んで少し離れた隣のテーブルのカップルとポツポツ話しながら餃子を食べていると突然一人の男が外から入ってきて香港カップルに向かって話し始めた。聞こえてくる会話の内容はタクシーの料金交渉のようだ。私はハッとすると思わず叫んだ。

「あなた達、どこに行くの!？」

カップルの二人もハッと似たような顔で私を見返す。

「君は何処に行くんだい!？」

「垂丁に行きたいの!でも一人だから、一緒に車をシェアできる仲間を探したいのよ!」

「俺たちも仲間をさがしてたんだ!! よーし!君もこっちのテーブルに座れよ!一緒に行こう!これから俺たちは仲間だ」

「やった〜!!」

私は声をあげて喜びながら、内心でも万歳していた。やった!やった!やったー!!こんなひよんな事から新しい仲間が見つかるなんて!タクシーのお兄ちゃんと別れてからまだ1時間もたっていない。勿論一人で垂丁に向かうより、仲間と一緒にいける方が楽しいに決まってる!!こうなると、朝、垂丁に行けなかったのもまた神様の思し召しかと思えてくる。さっきまで失速していた私の気持ちがまた速度を上げてグーッと上向いてきた。何が起こるか判らない一人旅の気分は下がったり上がったり、まさにジェットコースターだ。

香港カップルの二人も盛り上がりだしたようだった。彼の方が立ち上がると「よーし!君は彼女とここで待っていてくれ!俺は今からもう一人誰か仲間を見つけてくるよ!!人数がそろったら今日出発しよう!」と外に走り出て行った。

彼女の話ではこちらのタクシーも垂丁までの車代はやはり200元という事だ。2人だと高いので、4、5人のグループで垂丁まで行きたいと仲間を探していたのだそうだ。稲城には垂丁目当ての旅行者が大勢いるので仲間を探すのはそれ程難しくない筈との言葉どおり、程なくして彼が一人の中国女性を連れて戻ってきた。

「さあ、これから俺たちは一緒に垂丁に行く仲間だ。改めて自己紹介しよう。俺は^{アーロン}、彼女は^{ジャオチン}。香港から来たのさ」

アーロンはなかなか頼りになりそうな好青年だった。

「私は^{ユエンツ}元子日本人よ」

「私はウィン。江西省から来たの」

宜しく!と4人で手を重ねて握手しあった。なんだかとても楽しくなりそうだ。

(続く)

サマーガーデンレストラン

今回は、前回の「コロンボでもホテルが見られる」の中で紹介しました、サマーガーデンレストランの話です。

コロンボにスリランカの人達が友達同士で気軽に立ち寄ってビールを飲んだり、家族で食事をしたりする事の出来るビアガーデンの様な雰囲気屋外レストラン「サマーガーデンレストラン」があります。ここでは飲み食い出来るだけでなくホテルやリス等の小動物を見る事もできますが、私がお薦めしたいのはスリランカの人達の日常生活を見聞して頂く事です。

旅行者が地元の方の日常生活を見たり接したりする機会が少ないのはもちろんですが、コロンボに住んでいる外国人も地元の人との日常生活上での接触は、意図して積極的に参加しない限りありません。是非ともサマーガーデンでスリランカの人達の日常生活に接し、出来る事ならば会話する事にチャレンジして下さい。

店はコロンボ7にあるアートギャラリーの近くに 있습니다。周囲は国立博物館やヴィハーラ・マハー・デーウィ公園(通称：シナモンガーデン)等もある静かな地域です。入り口は小さく目立たないので昼間は見つけにくいかもしれません。見つけられても、屋外にあるので昼間は暑すぎるので止めておいたほうが賢明でしょう。昼間は暑いだけで面白い場所ではありません。旅行者の方は、日中は色々な所に行ってスリランカの事を見たり聞いたりして思いっきり汗をかいて下さい、ビールがより一層おいしくなりますよ。

夕暮れ時には入り口の看板に灯が入りますので遠くからでも目につきます。地理に詳しくない方でも簡単に見つける事ができますので、市内見物の後でシャワーを浴びてから散歩のついでにでもお出かけ下さい。

ビアガーデンの様な雰囲気と書きましたが、スリランカの方にとっては夕涼みがてら、比較的安価な価格で友人や家族で食事の出来る食堂といった感じです。スリランカの若いカップルがデートをしている光景もよく見ます、初々しいですよ。

私にとっては仕事の後や休日の夕方のにんびりとビールを飲める場所なので、ビアガーデンと感じました。ローカルスタッフを大勢連れてご馳走しても財布にあまり響かない場所としても重宝しました。たいがいの外国人は、冷房の効いた場所での飲み食いを好みますから、ここには外国人は殆ど来ません。

私は屋外にいる事が好きだし、自宅から歩ける距離なのでのにんびりビールでも飲みたい時にはむしろ好都合でした。この店に来る外国人は、私の他は近所に住んでいる年配の白人夫婦が数組だけでしたのでスリランカの雰囲気を十分に楽しむ事が出来ました。

それでは、サマーガーデンを楽しむための万国共通のB級グルメ店利用方法を紹介します。この方法はスリランカの人が行く店ならどこの店でもだいたい同じなので応用できますが、まずは店の雰囲気を確認して下さい、ホテル内にあるような高級な店では通じませんのでご注意下さい。首尾よく店が見

つかったら躊躇せずに中に入ってウロウロ、キョロキョロして下さい、席への案内を待つ必要はありません。店の奥の方に歩いて行くうちには、たぶんウェイターが見つけてくれてテーブルに案内してくれます。

ウェイターに会う前でも、気に入ったテーブルが空いていれば勝手に座っても構いません。屋外にあると説明しましたが、より正確に言うと雨よけの屋根はあります。一つの屋根の下にたくさんテーブルがある場所と、1テーブル毎に独立して5、6人は座れる場所とあります。地元の人と話をしたい場合は前者を、仲間とゆっくりしたい場合は後者が良いでしょう。

後は注文するだけです、ここには特別に名物といった物はありませんが、私のお薦めはデビルチキン等のデビルと付く食べ物です。デビルとはご想像の通り、とびきり辛い食べ物につけられている名称ですから、辛いのが苦手な方はデビルと付いていない物を注文すれば大丈夫。あとは、メニューを見て想像力を働かせてご自分で決めて下さい。

カレーやサンドイッチ、ソフトドリンク等もありますから、お酒を飲まない方や子供も安心です。但し、カレーはスリランカ標準の辛さですから要注意！人間に食べられない物はメニューには載っていませんから心配しないでドシドシ挑戦して下さい。

注文した物が何だか判らなくても、それはそれで楽しみですね、地元の味を満喫して下さい。値段は驚くほど安いので心配ありませんから、なるべく大人数で行って出来るだけ色々な物を注文してシェアして食べる事をお薦めします。但し、安いからと言って食べ切れない程に注文するのはマナー違反ですから止めましょう。

それから、ビールを頼む時には「すごく冷たいビール」をしつこい程強調する事を忘れないで下さい。さもないと生暖かいビールを持って来る時があります。地元の人の中には体に良いからと言って、生暖かいビールを好まれる方も多くいる事と、単に冷やし忘れていことがあるからです。

メニューはシンハラ語と英語の両方が用意してありますが、ウェイターの中にはシンハラ語しか話せない人もいます。そんな時は、注文したい物を指差し注文数を指で示してニコリすれば大丈夫です。隣の席で美味しそうなお物を食べているのに、名前がわからない時にも隣を指差ししてニコリすればそれでOKです。

次に、この店に行くときの服装と持参するものです。最初にホテルを見る事が出来ると書きましたが、ホテルが居るくらいですから蚊もいます。デング熱等の心配もあるので長袖、長ズボンの完全武装がベストですが、なにぶんにも屋外なのでこれでは暑くて寛げません。そこで蚊取り線香を持参して短パン、Tシャツで行く事をお薦めします。但し、蚊だけでなくホテルも近くに寄り付かなくなるのが難点です。

それでは、スリランカでの一夜をお楽しみ下さい。

皆さんに手にとって欲しいと願う写真集

『カンボジアの子どもたち』 遠藤俊介 著 (連合出版 2007年7月)

小川真理子

カンボジアの子どもたちの笑顔がいっぱいの写真集。どの子ども、目がキラキラと輝き、すなおで自然体、時々ちょっと恥ずかしそうな笑顔である。

決して裕福ではない、物売りの子どももいる、雨季になれば洪水で道が水浸しになり、水の中を歩いて学校に通う子どもたちもいる。でも、底なしの笑顔は、何なのだろう。見ているだけで明るく弾んでくるような写真は、あのポル・ポトの大惨事を経験した国の、平和になった姿である。子どもたちの祖父母や両親は、ポル・ポトのジェノサイドを体験した。それだからこそ、平和の喜びが、人々の笑顔からじかに感じられるのではないだろうか。

カメラマン・遠藤俊介さんの人柄も大きく影響している。彼は、自分自身が子どもなのである。一緒に遊ぶ時も、全く同じ目線で遊んでしまう。だから子どもが友達として安心して振舞うのであろう。数々のすばらしいショットはそうして生まれた。

彼は、実は私の勤務する東京工芸大学・芸術学部・写真学科の卒業生である。在学中から休みになるとすぐにカンボジアに飛んで行き、写真を撮っていた。ある時、「センセー、カンボジアの田舎をバイクで走ってたら、シュン！て呼び止められたんすよ。あんなところで友達にあうなんて、びっくりしたー！」と、とってもうれしそうに話していた。カンボジア人の友達はみな気さくで、彼を見つけるとすぐに声をかけてくれるようだった。またある時は「英語のテスト、たったの12点でしたよー。クメール語だったらよかったのに」と。世界の人々と心を通わすのに必要なのは、何も英語だけではないのだと気づかされた一言だった。カンボジアで亡くなったカメラマン・一ノ瀬泰造の最期の場所を見つけた、といい、一ノ瀬さんのお母さんにも連絡を取ってお知らせしていた。その縁で、本の帯に一ノ瀬信子さんが文を寄せてくださっている。

彼は卒業後アエラに勤め、カメラマンとしての力を蓄え始めた昨年秋、あろうことか、突然白血病に倒れた。「絶対直って、彼女と一緒にもう一度カンボジアに行く！」それが彼の意志だった。闘病中もブログに日々の治療や生

活の様子を書き込むだけでなく、カンボジアで撮った写真も載せていた。連合出版が本の出版を引き受けてくれて、治療の合間に写真の整理もした。

やっと完成した本を手にした3日後に、彼は力尽き、亡くなった。二人でカンボジアに行き、本に写っている子どもたちにこの本を手渡そう・・・と、最後まで、あきらめなかったという。

日本では憲法についての論議がやかましくなり、平和が脅かされそうな最近の風潮に不安を感じるこの頃である。ぜひ本書を通して平和のすばらしさ、ありがたさを感じて欲しい。多くの人が、そのメッセージを受け取ることが、志なかばで逝った遠藤さんへのせめ

てもの手向けになると信じている。



「中国語で歌おう!会」10月の歌詞

zài shuǐ yī fāng
在水一方

作曲：林家慶

作词：剥辨

lǜ cǎo cāng cāng bái wù máng máng
绿草苍苍白雾茫茫
lǜ cǎo qī qī bái wù mí lí
绿草萋萋白雾迷离

yǒu wèi jiā rén zài shuǐ yī fāng
有位佳人在水一方
yǒu wèi jiā rén kào shuǐ ér jū
有位佳人靠水儿居

wǒ yuàn nǐ liú ér shàng
我愿逆流而上
wú nài qián yǒu xiǎn tān
无奈前有险滩

yī wēi zài tā shēn páng
依偎在她身旁
dào lù yòu yuǎn yòu zhǎng
道路又远又长

wǒ yuàn shùn liú ér xià
我愿顺流而下
què jiàn yī xī fǎng fú
却见依稀仿佛

zhǎo xún tā de fāng xiāng
找寻她的方向
tā zài shuǐ de zhōng yāng
她在水的中央

wǒ yuàn nǐ liú ér shàng
我愿逆流而上
wú nài qián yǒu xiǎn tān
无奈前有险滩

yǔ tā qīng yán xì yǔ
与她轻言细语
dào lù qū zhé wú yǐ
道路曲折无已

wǒ yuàn shùn liú ér xià
我愿顺流而下
què jiàn yī xī fǎng fú
却见依稀仿佛

zhǎo xún tā de zōng jī
找寻她的踪迹
tā zài shuǐ de zhàn lì
她在水的伫立

lǜ cǎo cāng cāng bái wù máng máng
绿草苍苍白雾茫茫
lǜ cǎo qī qī bái wù mí lí
绿草萋萋白雾迷离

yǒu wèi jiā rén zài shuǐ yī fāng
有位佳人在水一方
yǒu wèi jiā rén kào shuǐ ér jū
有位佳人靠水儿居

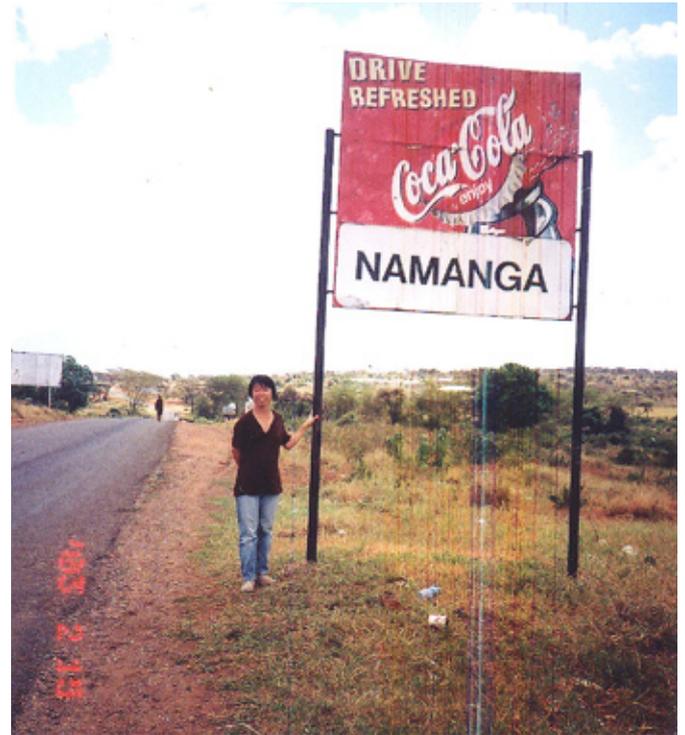
ケニアでの暮らしも落ち着いてきた頃、「アフリカの国境ってどうなっているんだろう？」とふと思いついて、仕事が休みの日に行けるお気軽な距離の国境の町をガイドブックを片手に探していた。

ケニアとタンザニアの国境に住んでいるマサイ族は、牛に草を食べさせるため日々国境を自由に行き来していると聞いたことがあり、興味があった。一緒に働いていたマサイ族の女の子が「ナマンガはどう？ ナイロビからだ近いよ」と勧めてくれる。アフリカ人の「近いよ」という言葉をあまり信じてない私。しかも彼女は長距離を毎日歩くマサイの人だ。「近いってどれくらい？」「車で2時間くらいかな」それなら近そうだを訪ねてみることにした。

小型のバス「マツ」は、ナイロビまで行かなくても私が住んでいるところから出ている。「ナマンガ行き」「80シリング」と繰り返すマカンガ(スワヒリ語で車掌さん)の声がして乗り込んだ。一時間ほどしてバスが乗客で一杯になり出発。周りを見回して驚いた。私以外は、マサイの人々だったからだ。15人くらいで、しかも女性ばかりだった。手には一様にポリタンクを持っている。聞けば、牛乳を売りにここに来ているとのこと。マサイの女性たちは、周辺の村から、早朝牛乳を売りに私などが住んでいた町に行商に来ていたのだ。そういえば、コップやビニールの袋を持って牛乳を買い求める人々の行列を見かけたことがあった。

テレビでみたように真っ赤な衣装とカラフルなビーズのイヤリングが大きく開けた耳にぶら下がっていた。そして、近くにいと家畜特有のにおいが体から伝わってくる。ジーンズにTシャツ、リュックサックにスニーカーの観光客の私。伝統的な彼らの前で、文化をもっていないかのような自分の姿は少し恥ずかしかった。彼女たちは、英語をあまり話せない。外国人の私にケニア国内の公用語であるスワヒリ語で話しかけてくる。その明るさ、屈託のない笑顔。私たちを乗せたバスは、終始歌声と笑い声が耐えなかった。言葉もあまり通じない、文化も環境も全く違う私たちを乗せたバスは、どんどん何もかもサバンナを進んでいく。途中でいくつかの集落でマサイの女性たちを拾ったり落としたりしながら。当然駅の名前などなく、みんな家の前に来たら運転手に合図して降りて行くだけだ。サバンナを100キロ以上で走る車。2時間もすると国境の町「ナマンガ(Namanga)」に到着した。

タンザニアへと続く「国境」しかない町。観光地であるアンボセリ国立公園へ行く通過点ということもあり、人々が通過していく町。人や物が行きかう活気のある様子を想像していた私は、しーんと、がらーんとしている町の様子に拍子抜けした気持ちになった。マサイの人々の住む町は、国境によってケニア側とタンザニア側に分けられているが、国境を表すフェンスがないところに行くと人々は自由に行き来している。私には彼らがタンザニア人なのかケニア人なのか分からない。国籍を聞いてみると、「そんなのは重要なことではない。重要なことは、牛の食べる草があるということ」と言っ



ケニアとタンザニアの国境に立つ

ていた。彼らの財産でもある何十頭、何百頭の牛は草を求めて移動する。そこに国境がたまたまある、だけのこと。

私のパスポートに押された出入国のスタンプ。タンザニアに入国するために払ったお金。すべてが人工的なものを感じられる。ここは観光資源があるわけでもないの、国境を過ぎると何も無い。安宿や食堂が数えられるほどあるだけだ。

しかし、独立後資本主義の自由主義経済を採用してきたケニアと、タンザニア独自の社会主義を一定期間買ってきたタンザニアでは、いろいろな違いがこの小さな場所にも存在していた。ケニア側にいるマサイの人々は、手作りのアクセサリを売っていたり、両替商が「タンザニアシリングあるよ。レートいいよ」と営業して来たり、「今日の宿決まってるか？」とビジネスをしている人が沢山いるのに対して、国境を過ぎタンザニアに入ると、何も無いのだ。

人も寄ってこないし、店も少ない。しかし一番の違いは、人。聞こえてくるスワヒリ語もなんとなく優しい。店に入って食事をした。メニューもなく、人もまばらな食堂。「魚があるよ」というだけ。飲み物も、タンザニア製のソーダ。ケニアではどこでもあるコーラやSpriteはない。水道もなく、洗面器に入れた水で手を洗う。30分くらい待つようやく魚料理が出てきた。「遅くなってごめんね」と優しい笑顔と声。

ケニア人から謝罪の言葉をほとんど聞いたことのなかった私は、スワヒリ語でごめんなさいは、samahani(サマハーニ)ということを知った。タンザニアの人は、英語を知っているのだろうけど、あまり話したがらない。スワヒリ語もケニアの人々に比べると、ゆっくりで優しい。両替をしたばかりで上手くお金が払えない私は、もたもたしていると、時間をかけて説明してくれる。おつりもきちんとくれる。

市場にもよってみた。がら一んとして活気がない。ケニアにはない野菜や果物もあり、一軒一軒のぞいてみる。お客もそんなにない市場では、私のつたないスワヒリ語でもいろいろ話が聞けた。野菜のこと、暮らしのこと、子供のこと、ゆっくりした時間、空気が流れていた。今までケニアにいて、少しはアフリカのこと知った気になっていたようなきがしていた。しかしたった数時間で違うアフリカがあった。アフリカ人は国、民族でみんな違う。国民性、民族性があるのだ。

夜になって、宿を探す。選択肢は2, 3軒。昼間にケニア側にあった宿も見ていたので違いに驚いた。ケニア側には英国式のB & Bのような建物で、電気、水道があり、不便さはない。しかし、タンザニア側の宿は、一番

いいところでも電気、水道はない。値段は、一泊1000円もしないが、トイレ・シャワーは共同で、快適に観光を楽しむというわけにはいかない。ベットしかない部屋の天井からは蚊帳がぶら下がっていた。机にはスワヒリ語で書かれている聖書。

夜、食堂へ行ってみると発電機によって電気がついていたが、一箇所のみを照らしているだけで、外は闇が迫っているのがわかる。頼んだ料理が、1時間くらいかかって出てくる間、食堂の前には車がどんどん乗り付けられてくる。夜が深まるにつれその台数は増えてくる。そして車から降りてくる人々はスーツを着て、携帯を片手に忙しそうケニア人のビジネスマン。タンザニアが社会主義だった頃から、ブラックマーケットへ電化製品や食品を流していたと言う。夜になるとそういう表情もこの町にはあるようだった。食堂では



巨大なアリ塚にビックリ



タンザワ側は何もない

アフリカの音楽がかかり、私も踊りの輪に入り、タンザニアの平和な夜を楽しんだ。

朝になり、宿を出てタンザニア側を歩き出した。ロバがゆっくり歩き、遠くにはキリマンジャロだろうか、とてつもなく高い山がうっすら見える。大きな蟻塚が無数に存在し、木には鳥の巣が沢山ぶら下がっている。しーんと静まり返る大地の中を、いつものようにマサイの人々が牛の赴くまま歩き、国境を越えていく。

私がこの町を訪ねたことを証明するものは、NAMANGAと書かれた看板の前で撮った写真一枚だけだ。しかもそれ以外は、遠く首都まで延びた道が続いているだけだ。

アフリカの国境の町ナマンガで、「国境」について考えた週末だった。

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

高粱のどっちを見ても空少なし

gāoliáng gān gān gāo
高粱杆杆高
bùguǎn fàngyǎn héchù qiáo
不管放眼何处瞧
dōu juéde tiānkōng xiǎo
都觉得天空小

季语：高粱，秋

赏析：中国东北地区的高粱是举世闻名的，许多歌曲中都有吟颂，犹如钻进遮天避日的原始森林，不论问何处瞧，都觉得天空小了许多。是呵，不然，我们怎么会称之为“青纱帐里”呢？

北陵の門前に風天高し

běi líng qìshì háo
北陵气势豪
ménqián fēngqín yōurán piāo
门前风琴悠然飘
cánqiū tiān yù gāo
残秋天愈高

季语：天高，秋

赏析：沈阳北郊的北陵公园总占地330公顷。1927年奉天省政府将昭陵及周遍官地彼辟为北陵公园。昭陵始建于1643年，1651年建成。园内有古建筑群，湖面广阔，气势豪放。此句为白描般的写生句，视野宽广，表现出了北国暮秋的特点，对于一位外国人来说，当是难能可贵。

‘わんりい’が15歳になりました

‘わんりい’の活動が正式に始まったのは1992年の9月からです。

丁度、諸外国の人たちが日本にどっと増えた頃でした。また、80年代の末に起こった天安門事件を契機に多数の中国の若い世代が、自分の未来を探しに日本に来、日本でも中国文化への関心が飛躍的に増した時代でもあったかと思えます。

1992年5月から7月にかけて、中国語を学びたい人と気功や太極拳を学びたい人で、中国語や気功・太極拳体験講座を開き、講座を始める話し合いの過程で、「今、こんなにも日本に外国の方が増えてきているのに仲良くできないのはもったいない」という声上がり、「それなら講座のほかにささやかでもいい、お互いがよく知り合えるような活動も平行してしようよ」ということになりました。行政レベルではまだ正式に在日外国人への支援の形が整っていませんが、国際交流協会なども立ち上がっていませんでした。

中国語講座と気功太極講座の講師をお願いしたのは、中国国立戯曲学院第一期卒業の若い京劇の俳優さんでした。両講座が協力して先生ををサポートする活動がそのまま会の活動になりました。京劇鑑賞会、鑑賞講座など京劇紹介活動を通して、京劇の音楽を担当していた中国民族音楽の方たちとのかかわりもできました。

活動はその後、中国民族音楽演奏会、料理講座や展覧会などなど手づくりのボランティア活動として広がって行きました。多彩な活動の様子は、‘わんりい’HPに‘わんりい’ヒストリーとして掲載してありますので機会がありましたらご覧頂ければです。

活動が活発だったのはメンバーたちの好奇心が旺盛

だったことがあるかと思えます。また、外国籍の人達がどんどん周りに増えていましたので、世の中全体が「分かり合いたい」という気持ちや外国の文化、特に身近な国でありながらあまり知られないで来たアジア諸国の文化への興味を深めていたと思えます。

活動の当初の合言葉は、「文化は違ってみんないい」でした。活動の趣旨には「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知ることが、国や民族を超えた理解と友好の一助になる」との思いもありました。

しかし、15年の活動を経て感じるのは、全ての文化を育ててきた根幹は、もともと国や民族を超えた、人間そのものの存在だということです。喜び、悲しみ嘆き、感動し、愛し合う人の心は万国共通だということです。それぞれの文化は表向きは違っているように見えてもその深いところで人間の存在という太い絆で結ばれているのです。だからこそ文化は影響しあい万里を超えて伝わって行くのでしょう。それぞれの文化を知ることが、「国や民族を超えた理解と友好の一助」などではなく、ともに人間どうして深く共感しあうということなのです。その意味で他国の文化に関わる活動は、常に責任を持って真剣に関わらなければならないといっそう自覚する昨今です。

11月30日(金)、『わんりい’15周年目の節目を記念し中国民族音楽の演奏会を開催(詳細下記又はチラシ)します。‘わんりい’の古い友人である、中国笙の演奏家・銭騰浩さんが‘わんりい’15周年のお祝いのために、一流の中国民族音楽演奏者をコーディネートしてくださいました。必ずや素晴らしい演奏会です。是非、家族の方やお友だちと誘い合わせお楽しみくださる様に願っています。(田井)

‘わんりい’15周年記念コンサート

天女たちの華麗な楽曲「二胡、中国琵琶、揚琴と笙の演奏会」

～ 中国民族音楽演奏の精鋭たちが奏でる魅惑の中国民族音楽 ～

出演：^{チェンタンハオ}銭騰浩(中国笙) ^{リュウフォン}劉鋒(二胡) ^{ウェイウェイ}ウェイウェイ(中国琵琶) ^{チャンイエンジュアン}成燕娟(揚琴)

於：町田市民フォーラム・ホール(町田市原町田4-9-8)

’07年11月30日(金)▶19:00開演(18:30開場)

JR横浜線町田駅ターミナル口・徒歩3分/小田急線町田駅南口・徒歩7分)

●参加費：2000円(188席/全席自由席)

●会員券購入方法

(1)郵便振替口座‘わんりい’(00180-5-134011)へ、人数分の会費をお振替下さい。

振替確認後、会員券をお送りします。

(2)鈴木楽器本店(小田急線町田駅南口前)で直接購入できます。☎042-726-9811

問合せ&申込み：☎042-734-5100 ‘わんりい’

主催：日中文化交流市民サークル‘わんりい’

後援：中国大使館・文化庁 (財)日中友好会館 (社)日中友好協会

協力：NPO法人ネパール・ミカの会/NPO法人アジア草の根交友会/

STEP by STEP平和/日本スリランカ文化交流協会



揚琴



中国琵琶

どくらく しゅうらく
「独楽・衆楽」 — 中国パブリックアートの今

中国美術学院の教員と学生による絵画、彫刻、映像などさまざまなジャンルの作品約90点。現在の中国の「パブリック」の概念と動向を紹介し、現代美術の未来を展望する。

(参加：無料)

● 於：日中友好会館美術館

(文京区後楽1-5-3 日中友好会館1F&地下1F)
行き方：JR総武線・飯田橋駅東口下車・徒歩7分
大江戸線・飯田橋駅C3出口より徒歩1分

2007年9月22日(土)～10月21日(日)(火曜日は休館)

10：00～17：00

主催：(財)日中友好会館
中国美術学院

後援：中国中日大使館
中国美術家協会・他多数



● ギャラリートーク

9月22日(土) 15：30～

講師：楊奇瑞

(中国美術学院視覚芸術学院院長)

～作品解説と中国パブリック
アート事情について～

● 問合せ：☎03-3815-5085 (日中友好会館美術部)

まるごと1日パレスチナ

第10回町田発国際ボランティア祭2007夢広場プレイベント

2007年10月8日(月・祝)

於：町田市民ホール第4会議室

14：00開演 19：30終了(開演14：00途中休憩あり)

●参加費：一般2000円(前売1500円)

●学 生：1800円(前売1300円) 要事前予約

主催：STEP by STEP

共催：(財)町田市文化・国際交流財団/まちだ大福帳

● タイムスケジュール

14：00 開場

14：30 「アルナの子も達」上映

16：00 森沢典子さんのお話「パレスチナ側から見た和平」

17：30 休憩 パレスチナのビールとハーブティ・軽食

17：30 「Women in Struggle～目線から」上映

18：30 清末愛砂さんのお話「占領下のパレスチナ

——元政治犯の女性として生きること

19：30 終了

申込&問合せ：042-722-4260 (国際交流センター・藤代)

町田市民ホール

(財)町田市文化・国際交流財団

194-0022 町田市森野2-2-36

☎042-728-4300

JR横浜線町田駅西口徒歩10分

小田急線町田駅西口改札口徒歩7分

*駐車場はありません。



日本・モンゴル国交樹立35周年&楽団設立15周年記念公演

モンゴル国立馬頭琴交響楽団

吹きわたる爽風になって・・・

●11月19日(月) 東京・浜松町メルパルクホール

●11月21日(月) リリアメインホール(川口総合文化センター)

19：00開演(18：30開場)

入場料：S席 6,000円 A席 4,500円
(全席指定)

*未数学児の入場はご遠慮下さい。

主催：日本モンゴル文化経済交流協会

問合せ：☎03-6427-8086

(ワード・トレーダース)



モンゴル族新人監督のデビュー作

映画・白い馬の季節(季風中的馬)

遊牧の民の想いをのせて白老馬は何処へ行く、遊牧民ウ
ルゲンと愛馬サーラルの物語

於：岩波ホール(10月6日(土)より)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-1

岩波神保町ビル10F ☎03-3262-5252

第25回ハワイ国際映画祭NETPAC Award(最優秀アジア映画賞)受賞

第26回ダーバン国際映画祭最優秀撮影賞(ジョン・リン)受賞

2005年/中国/35ミリ/カラー/1:1.85/105分/ドルビーSR

モンゴル語 <http://shiroiumajp/>

講演会「ぼくは13歳、職業、兵士」 参加無料

～ウガンダの元'子ども兵'が教えてくれたこと～

内戦が続くアフリカ東部のウガンダの事例を、写真を使
って紹介しながら内戦の中に生きる子ども達が、子ども
らしく生きる社会の実現に何ができるのでしょうか？

講師：鬼丸昌也さん(テラ・ルネッサンス〔平和NPO〕代表)

1979年生。立命館大学法学部卒業後、さまざまなNPO活
動に参加する中で異なる文化、価値観の対話こそ平和を
作り出す鍵だと気づく。2001年に訪れたカンボジアで地
雷被害の悲惨さを知り、「全ての活動はまず『知る』ことか
ら」と講演活動を始める。

著書「ぼくは13歳 職業、兵士」(合同出版)

12月11日(火) 10：30～12：30(10：00開場)

於：杜のホールはしもと 8F 多目的ホール

JR横浜線・橋本駅北口前/京王相模原線・橋本駅下車徒歩5分

申込み：03-3382-5665(9:00～17:30/日・祝を除く)

コープとうきょう ネットワーク推進室

*11月7日(水)までにお申込み下さい。定員：100名、応募者
多数の時は抽選。その後余裕があれば受付可。

【テラ・ルネッサンス(平和NPO)】

平和教育事業と地雷除去及び被害者支援への資金提供なども

主催：コープとうきょう/7ブロック委員会

●9月定例会 10月18日(木) 田井宅 13：30～

●10月号発送日 10月29日(月) 田井宅 13：30～

第5回留学生トークプラザ

町田市や周辺大学で勉強している留学生たちは日ごろ何を思い、どのような留学生活を送っているのでしょうか？

主催：(財)町田市文化国際交流財団

11月11日(日) 14:00～17:00

町田市民文学館ことばらんど 大会議室

定員：60名 参加無料

*定員になり次第締め切り/申込み期限10月20日(土)必着

申込み方法：住所、氏名、参加者数を明記して、葉書、ファックス、又はEメールで送る。

1)葉書で

宛名：194-0013 町田市原町田4-9-8 町田市民フォーラム
4F 町田国際交流センター(国際理解部)

2)FAXで：042-722-5330

3)E mailで：info@machida-kokusai.jp

問合せ ☎：042-722-4260 町田国際交流センター

【'わんりい'の原稿を募集しています】

原則として、毎月発行(2月及び8月を除く)の'わんりい'は、'わんりい'の会員と関係者の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。

'わんりい'の頭には日中の冠を載せていますが、中国に限らず各地(主としてアジア)で体験された楽しい話、見聞した面白い話、美味しくて珍しい食べ物の話などなど、気楽にお寄せいただいているいろいろな角度から諸国の文化に触れてみたいと思います。

紙面が16pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもありますのであらかじめご了承下さい。尚、原稿の締め切りは20日ということにしていますが、編集の都合上、早めに頂ければ有難いです。

(田井)

【お出掛けください】

第10回町田発国際ボランティア祭

■ 2007 夢広場 ■

参加：無料

2006年11月4日(日) 10:00～16:00 今年のテーマ「共生・私たちの地球」

夢広場は、今年で回を重ねて10回目。本年は10回目を記念して、初心にもどり福祉団体の参加を含め「共生」というキーワードをもとに浄運寺や地元商店会のご協力も得、下記3会場ですべて以上に幅広いお祭として開催されます。

● 本会場：町の駅「ぽっぽ町田」

エスニック料理いっぱい！民族芸能いっぱい！

JR横浜線ルミネ側改札口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分
町田東急デパート裏109ファッションビル裏通り

● 第二会場：浄運寺境内

民族芸能とエスニックグッズのお縁日開催

● 街かどギャラリー(10月27日～11月4日まで)

実行委員会本部の設置及び国際交流センターの各部会のパネル展示と児童画の展示。

主催：2006 夢広場実行委員会

共催：財団法人町田市文化・国際交流財団

問合せ：042-722-4260 町田国際交流センター



インドネシア・バリの踊り 2005年夢広場

町田発国際ボランティア祭「夢広場」は、国内国外を問わず国際支援と友好の活動を続けている、国際ボランティア団体の交流の場です。1998年以来毎年秋に開催され、本年は10周年記念のお祭として開催されます。

「夢広場」本祭の11月4日(日)は、町田市内外の30を越す団体が団体が集い、それぞれの団体が支援・交流している国の民芸品や料理材料の店や、飲食の模擬店を出展され、仮設ステージでは華やかな衣装の、わくわくするような楽しい民族舞踊や民族音楽の演奏などが上演されます。お出掛け頂ければ、きっと世界の国々が身近に感じられる楽しい一日になるでしょう。

'わんりい'の会も出展して9回目です。今年も昨年同様、ぽっぽ町田会場で、焼きたての味は抜群に美味しい遊牧民風味の炭火焼エスニック焼鶏を販売します。

ご都合つく皆様のお手伝いよろしく申し上げます。



ぽっぽ町田地図 <http://www.poppo.jp/>